

コミュニティの再生・創生と宗教

『現代宗教 2017』編集委員会

2010年以降、「無縁社会」や「地方消滅」というキーワードのもと、日本におけるコミュニティは、それまで以上に大きな危機に直面していると認識されている。少子高齢化、東京への一極集中と地方の過疎化、地方自治体の財政破綻など、もはや対症療法では解決できない諸問題を日本全体が抱えている。そしてこのことは同時に家族や地域に根ざしてきた日本の宗教が危機に瀕していることをも意味する。

しかし2011年の東日本大震災後、コミュニティと宗教との関係は新たな段階に入ったともいえる。祭りや芸能がコミュニティ再生のシンボルとなり、非常時に宗教施設の有する資源力が見直され、孤立しがちな高齢者や子どもや外国人のサポートに関して宗教の力は期待され、ソーシャルキャピタルとしての宗教の可能性に、社会もそして宗教者自身も気づきはじめた。かかる状況に鑑み、(公財)国際宗教教研究所編『現代宗教 2017』編集委員会は、今号の特集テーマを「コミュニティの再生・創生と宗教」と定めた。

本誌所収の「対談：伝統宗教とコミュニティのゆくえ」では、コミュニティにおける宗教の役割を長期的な展望をもって多角的に検討している。特集論文では、渡辺観永「寺院環境の変容」が、自身の寺院で始めた朝粥の説法会から、人々をつなぐ活動の輪が地域に広がっていく様子を伝えている。また寺田喜朗「日本会議と創価学会」は、安倍政権を支

える日本会議と創価学会に焦点をあて、前者がコミュニカルな地域共同体に基礎を置く神社を、後者はアソシエーショナルなガバナンス機構を備えた創価学会を、それぞれ背景にしたことによる規模・影響力の違いに注目する。もちろん継続特集である「3.11 後を拓く」のテーマのもとに寄せられた3論文も、「コミュニティの再生・創生と宗教」を考えるうえで、極めて重要な知見を有している。

あわせて特集テーマの射程は国内に限られるものではない。アラブの春から一変して紛争・内戦状態にあるイスラーム諸国、日本と同じように世俗化の波にさらされ、さらに多宗教・多文化の影響を見据える欧米キリスト教諸国にも私達は目配りしたいと考えている。コミュニティの崩壊や危機に宗教はどう応えるのか、また信仰や信念や苦難の体験を同じくするコミュニティが社会に与える影響など、グローバルに進展するコミュニティと宗教との諸課題は、日本の宗教界がごく近い将来経験することであろう。実際、ムスリムの施設の増加や国内カトリック教会の外国人比率の上昇など、在留外国人の動向が日本の宗教地図の一部を塗り替えようとしている。

本誌所収の嶺崎寛子「グローバル化を体現する宗教共同体」は、数千万、200カ国以上に広まり、同時に政教分離を是認するという特徴を有するイスラーム宗教共同体アフマディーヤが国境を越えて展開しつつ、ローカルな相互扶助の機能を有することを描く。また山田政信「旅する文化を生きる人々」は、ブラジル・スペイン間を行き交うペンテコステ教会信者の有する、特定のエスニシティを超えた「旅する文化」が、オルタナティブなコミュニティを形成していることを、自身の「旅する文化」を踏まえて指摘する。言うまでもなく、こうしたムスリムやペンテコステのコミュニティは、日本でも珍しくなくなっている。

また本誌は信仰共同体とは異なる意味でのコミュニティと宗教との関わりも念頭に置いている。河西瑛里子「地域「コミュニティ」の創出と宗教」は、従来、個人主義的志向が強調されてきたスピリチュアリティをめぐる実践と信念が、弱いながらも凝集性をもち、不明瞭ながらも境界線のある「コミュニティ」を形成していることを英国グラストンベリー

に見出そうとする。堀江有里「コミュニティからネットワークへ」は、合衆国におけるエイズ・アクティヴィズムの事例を中心に、一部のキリスト教によって「罪人」ともまなざされた同性愛者たちが、自らの属性もしくは共通する課題を共有するなかで、従来コミュニティから離れ、「選び取られたコミュニティ」において経験を共有し、自己尊厳を回復していく過程を明らかにする。

以上のような問題意識と構成によって『現代宗教2017』は編まれ、コミュニティと宗教との関係に心寄せる宗教者、市民、研究者に有益な示唆を与えるに違いないと自負するものである。

(文責：弓山達也)